西山物語

こまの
大方の
かく

へ13
3194
1

へ13
3194
1-3

へ 13
3194
1

昭和九年
十月二日

今日古今人情や古今語言や語言
ゆいて異や事古今有所隆人今雅俗や是以
学者通古語や義古今雅俗通古
大率如彙就經寿岩物快事偽弘古御
今人偽為雅古業古中東於殘古理物
古古今人偽為雅書唱国風後古学者

心于彭楷志懽于詞場夫乎彭氏世國風
世稱其度詩于既白仕載于白宇弱冠游
于泮。列新而出古書。少一
為元甚名於新明。吉安郡宮丸事
清衙原于嘉靖。撰古于記。也稱述乃嘗
新于字法。字俱高。郡高。於撰。時峰。以為
仕者。西于陸。於下至。人屋而和吉。可

歌來。後古陸。世世法。仕國。西。於陸。于古。
陸。吉。撰。于彭。於。于。下。屋。吉。京。彭。為。屋。夢。
不。休。於。彭。于。吉。陸。彭。新。吉。余。彭。西。勉。吉。於。吉。
吉。吉。事。吉。吉。世。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。
于。於。屋。於。吉。于。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。吉。
于。仕。于。雅。于。彭。于。記。於。事。於。為。三。事。題。西。西
山。於。陸。為。吉。國。風。屋。及。吉。彭。者。於。彭。習。文

猶之分置方於萩宿之間。年号を古雅
に。御旦方分に。詔を更に。請加爲に序
明和五戊子春二月

金沢兼雄老杖多撰

釋尊
雅善
西山

西山物語

陳太理法師傳

てうもの乃書

山背（やましろ）の国に訓（たとゞ）れる松の尾といふ所。大森
七郎といふ人の一母（同産）なりしが。日本紀（一母）
いりとの名をかへて。そのほとなる人。
しのもの。書はやくなくうつて。老母
おいをを。家をまづ一けまでゝ。みられて
とゝもかくしたこのぼさ（竹をもて大切に作ること）まいらせられぬ。
おなじ氏乃家にて八郎といふもの

鰐夫

ひのくまもやしをそて。和名抄こせ書れるみう
猪をあまがまれご 愛子 万葉 乃あ風が。おの名を宮ゐ 宮み
といひ伝へ。是もおなじ事さて。世ひろ
らんごと 伊勢物語 渡世なり とをなり紀まに。たゝ力をひとを風
古事記 日本紀 剣術なり つぎなるむよくしきれで。是を人よ
ゑてかそけき 幽 万葉 たづき 便 万葉 とハなり風。七郎
ハまさひとをは其ひとをはるれてこれそ
ゆを射るゐふるこをてもよくしり。
弓乃たけハ六尺二寸 むさう ふたき だるとて。太力もこをる

ものをそをたりるゑ式。七郎なりるを
とてそ。日本紀 大森義 斎 ていひ。その風乃ちつこ
古事記 日本紀 子孫 万 まて。八郎 従弟 から 新 にすなをを
きを風。さて七郎がそけるたゝ力ハ。楠正成のぬ。
はのかみ乃川まて軍 彼れてくせたまし
ゆ。西 ちきを風つるぞ乃太力 古事記 はひぐりのたゝ力 はひぐり八今云とかり たゝ力八彩の変
乃とべるをを義てとをはりて。秋京 家 の孫し
ねきを風がそのたゝつこなれど。今このいを
よとぶ風て。学をかなれはるざなを

どおいのほうへきゐ。きのくも楠乃めり惜
しきゆゑ御ーたまひ。ほきむ。ほうのほきてそ
なくく祝詞（種々）うれ日本紀（奇なり）事ども也けりこそ。
世にいのほうへける。ひのぐ。七代（なよ）だうえれ
たなり山おのの。此ちカとさゐ山をにをさめ
まつりきゐよりさ。おれけち（古語けちのゑきこと）どゐてゆのえ
びゐとみさえて。なる大宅（おふやけ）乃いゐ（長臣）のこ（万葉）
とおりてこれめおきゐよりなる。きのゐよ
今たらほうびゐ。家も貧（まげ）しくゐうめるる

けよ。ハ。ゆ。て部ぞそのゐ乃みちをこがきて。
今の世ゐまきを（日本紀古事記万葉大夫まえ）とひくもの補（たへ）（古事記日本紀）ら
ゐ乃男ゐそなれ。ゐれ。ぼらくなりゐるけの
家乃たらとまきゐハ。ぼうの太カ一ゐる家。
さおをめしく（保氏物語世ちしくえ）かぼおくぼばうゐ
みおそ至てる。山きよをえつるこそ。ち情
きれ。（保氏物語杉情しきえ）たとく京そ貧しくなゐも。
ものさ祝（さが）（日本紀古事記世云先なり）ごとの如（いでく）ゐ。ゐもぶでゐ
ことかけ。（伊セ物語行とこ云ようけなり）其太カとうくでハ

なりぬるたらも（万葉七宝之）秋よおいくハよりなり（由）
と。ほとけ（仏）をうしなひ（失）ぬ。ゆえ（因）
そ乃へたて。彼七代（なゝよ）ハ代され親をさめ（治）ぬ
ゆる（揺）ぬ。ぬ。おのれ（己）こそ大森を
くりよりてさ（差）ぬ。今こそ（五百枚）いのち（命）を（日本紀）
みを（身）へ（辺）ぬ。ぬ。ぬ。

とかへりて行むとすれば。ぬしの家ぢを。たゞ(愚)に(万葉)
はれや見たまへつる。ほゝきに(欲)(万葉)こゝに。ふかうき
りのうちやおとめのまゆみ。さぐ(清々)く(日本紀)ぬお
そもりて。(源氏物語今云歌付之)こゝろもて(袖)(古語)をかきなのせ。孫
とはまぐ(利)かうくおたくもの。七郎ときこう
こゝろとぬをとゝこゝそ。ぬのうちをはきまうすを
いちまく(いセ物語)知りぬれば。こゝかこゝさ(恐)(古語)こゝをとゝぐかで
中はる年よ。さればどはさぐ(ゆ)そもきまうよ初む
とゝこゝおもてまつれば。いぐかりて帰らせ。

今はぬへとうけのみ。ぬ(渕)ちのよ(幸)おべき袖
こゝれなり。ぬ(万葉)ぬまのよ(泉)ぼくこゝそさむ
らくて。おもぼ(封)ぼこぐ(ゆ)さとぬ。みそぬ(二十牧)ら
いまもぬ(五十牧)られぐもいとぐみぐはのゆぶきれ
あかるおぐこゝなぐ。ぬぐぐちはぬぐたちさ
ぐてこハあぐ。ぬ。たくくぬ石よ河
ぬ。たくらやくぬぶけ水む。ぬれこゝ行く
と物よ。ぬまおこゝなりとかぬらを書
ぬ。ぬはまのだく。たくがぬさとれ。ぬ。みぬ
(古事記)

そこをうちまのりはぎうつ所をうつ
さ海松を取ぬ。ちと部つとたちて。彼をかを
こあたりたるし金戸（万葉鍵さ金戸）とやぶり。彼なな
がらひきあけて。無ようなる人を捕たらむ
ア。今こそ捕えぬなれ。速（うつ）とあげ出せ。
ぬる人の郎。竹取ものがたり大めきたる人ひとやはいる。能ある人
まいりてのるぞ。いとはやく船出してこぎ
うたむ（古事記用特捕猛批之字）ほどけ。いまあなうとたて

みなそこをうちまのりてぼうとうもれ
ぬ。きえぬとそ。

かへ乃巻

七郎なりまさも八郎ゐるとゐるも。右乃ゐせ
てかろぶびりぐ(術)ぶよりぐとなみてさとしきり
りれたぷまるをまれ(大人)ゐりの秋うし(古事記 万葉)とたへ
たくまつりてぷちこそ(集)ぶ(古語)ぶ(古語)ぶ(古語

なでてぞうの妖ぞうまで彼さゝゆるれ
ざもさでぞ見るかまぞくひるる（原氏物語）これハまさに（正）
（万葉）彼方をさゝる過るあるぞ。きらどもれ出る
はるるなど人くいひひる。母人ゝ。
ゝ月いあ紀（撮）（イセ物語ハ云かゝ方）たゝう男。月ぞ交
らひらぶ。ぞるぞ（間）ひのあるぞ（老女古語）をそら
かゝ風はるもゝ春ぶ。八郎ぞ書ゝき風
ゝのハぞ母乃ゝ月ゝとゝくゝるすあゝ
れぞいぞくなむ。ぞるぞ。ぞ郎ぞ立たゝ

進止日本紀てぞゝとぞゝやみひぞ風ゝ
ゝ八郎ハゝもぞゝ（徒）（ゝハオこをゝてゝ）もおほゝはゝひる。
ゝつけゝ。寛もゝゝきみちあれハ深ぞゝぞ風
乃かのゝけぞゝ（人参）（和）或ハとゝゝ（虎）ゝ弗（万葉ゝ六とゝゝ）乃きも（膳）
真孫（ゝ玉）（万葉）やゝ抜もゝたゝやゝゝくゝひゝゝあぞ
訳のごゝゝゝなむ仕へられハぞ郎たゝからな
みぞおゝゝてゝかゝ風おむゝひハゝ月のぞゝかせむ
ゝぞゝ拝ゝろゝみ（報）（日本紀）ゝきゝ風ゝかゝてゝゝゝはぞ
めまでやゝみゝ。郎ゝくゝゝゝてゝゝれぞ。

原氏物語 夜ハ世乱ヨリ

たるみの髪よ老(おいき)ぬ乃さつれさ紅出る原
ん花(ちら)して。いとあつ〳〵うみもよろこぼひ(喜)ぬ(艶)とう
きの。おやよりは毎のいづれとうみ(万葉 看病)
日(つきひ)の。ふ(二)とを(百日)ぬうちとなりけるに。
(ちらら)見ぬ事はとそハいと〳〵。ハ部ご(若子)
くご(子)新乃宇次ゆみとぞ。ハ部がとあもやうの勢
てはきそりせまりせきう。はうを家かほう
たちさよの〳〵まそ(風流)ぬ(万葉)ごとのこのみ。のよ

みみ〳〵ごとば。を(明直)さ〳〵(日本紀 長くの家)まを風ひしもなど。
うそそちまりうひりみなりあるとき風。
みとを部ぐひのとなれば。十まり八つよなるる。
是てもの〳〵部のそ(端正)ぢちぐ〳〵。(日本紀)みやび
乃道をは毎なりむをはさよりあ人たる。
たぐひなる〳〵ひ〳〵ちば。御前
ぐむもあ(原氏物語 紫式部)ぬ(原氏物語)まぐくなを
みをを。さてかく〳〵ますりのあのぐと毎うのい
し。(万葉 立事記)ひ人おく〳〵ちねむるをばさ(万葉)まは。(熟睡)(遠)

密
みそうみ 古語 おゆび 指 和名抄 ゆびの指なり
てゆびをさす
さゝめゆびは 万葉 さゝめゆびは
ゆびをひなれぬるとる手はゆびをきぬ
きぬぬぎすてゝ 延乃れ あ柔やりゝはゆひ
ゆひ。さゝ。たゝ。まぐれもこゝかこゝちた
されて。ゆれゝ。ゆれゝ。ゆのとゆぐさめよ
見えぬ。おハなれゝ。ぐ。ぐ。ちゝまハ小金山。ぐ。ほさ
ハ高尾ゆゝ。ぐ。ぐ。ゆのゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
て。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

愛岩

ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

ちの色。いづれうまさ風をみそなはすのし
と。額田女王（ぬかたのめ）おほきみ（天武の夫人）の御（側）うへよりはは
き風が。おきてみすこしうたまの。玉乳
の中よ。そのそれはいとおもしろれど。さき
ほりれど入るもそてび。みれの葉はれても
忍
ぬ。万葉 まさまよ。とど置てぼなぐ。
万葉 長息の歌 志は秋そめてまされとゆえ
愛
ぬ。さ風のまよいさそゆれとびおのれかひ
心 衆 辟
がこの葉 よハ。ど風の梅（さく）そちやく。秋

けりみぢハうりのいやしぼ。ぼ。うまてこの
四せむ。人をもがさ。のたちのあるのびし
れ見人の向峯むりを万葉のそこをみぢ。だと
ていこもの。おもてよ。ちうきのおやつう。
身のは美なる紫のるをぶとて。ひとみの
さくをみも風ごてこ。見こるあでまよ。
人を。海のいろごのみのハとべび。びおる
が月の夕辭（ゆう）をみぢ。ちうなのびたる。松柏
こ秋。たぢまこ。真心ちう万葉 乃海男をとこ女と那古詞なれ

さ風ハ庫(かぐら)のうちよも。松と梅のこまのうち
よ立ても。さ色ハうつばとうさてしやのけ。
稚世こ(古事記日本紀 夫さ)の。ひおさ郎。ゆ身れうれ知た
まり時。唐の時。こみはさ風のすこ花かさ色
れぱむまめ(ぎ)色ハ松(まつ)とやはし。かくとやは
ひと。みぱうに四(と)れ。ぬ花ぬ。ぱ花ひ。
おりくらく。ぱハ。ふ。せよつで。こまのしに
まけて。おれたとれ(度)風ぱいくさう
も見さ。うとうあ。ぱ花ぱ。ふ。よ。

たるとも。ゆ。ひで。雪(ぱ)ぬ。ぱ。ぱけさ(ぱ 葉)
いうたさ。あ。おりで。ぱよ。さで。うぱ
の。色。ぱ。こ。せ。こ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
ひとそ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
さ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
乃色。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
い。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
まひ。の(万葉)こ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。

たカの巻

西のゆゑよ所領とこそ語りつたへしとこのかた長兄紀日本

雲にうつり寺はたそ兵おりの通とこのみおそれ恐

ふりさけみるまぢ。そ射。馬ゆ。ほこをつき。

ちかとなりてをのこ共のたちとなりく

人をだ。おほのよりを。をたりて。家のほ之

びをぬしーのひきを。ゐるを。ゑ部八郎なる

こをゆすりをる。侍士あり人紀日本をはかは。彼れ

ふるゑが太カはをたゆをたためをよ。ぢを

まれ。かをゐ。方をい人のをと語をとをたのせ

ゐをられあやをでまげはをとをたをちて主家臣

ゐをきゐほをを。ゐをうををゆを。こ氏の内

神のいをのゆ解を祝なり。ゐをゆ撞た

まを。ゐをやををちたをゐんと。ををくその

をゐををゆををあ万葉鳴さうをめをを。ゆをゆ

えをかををび。をを部をゆをゆをびをを

勝をあををいゆをををれ。ををゆをかを。ゑ

万葉集をを太カはゆを世のゆををたををゆ。八部

みそうよ七節ぐさ（許）ありこいひ風やうは。
たびのうの家のほまれとハいと。おろず
かいなとりておれど。ちうとをのうをつく。
たくまりおるもあ風。芸ひとあ（いせおの物合の）を
いくをむ。たで者ひ花はるうり手ひ行れう。
其ほきてたのみゆえまりせられこと
ひうそこのはうばハことれきて（万葉れうきて）ゆとれる
まうたまうで。和ちうれうばうえー。
さ風時て和ちもどらうみうぷうだな

ほうでうび。きうは馬和は。和中の乃握
みもを海りなを。弟ひうりまてさむうぶ
海を（凱）馬の弟めく（万葉）ども。麻のふを海よ雪色
をうみ人をひうびとほこうの（万葉）べうが。注
ひうをまうくをうびうりのうれべう海
う（万葉）を見るみうえうぶうりはうを玉
のれうは。いうさ風ようりうう降ら
（古語ケウハ行ハウ）なうで宇須みをそのはいうも（并）
（日本紀古事記）れうぶうぷうるひうのむうあとむうて。

ぞやうなごとも、そのめのまへ
にひろし（保名物語 世々云 威光）何のそなへ
ものもとめ（標 万葉）おきてたまへ（賜 催馬樂）よしゆゑある
よ。そこ部ちかくなれば。こゝはなさようぞや
べきるるう。そこハ常ゆゑもらとなつえ
なりのくぬ。はるぶれ。ぶたたのまつなれ
ば。れのわがきの大カ。なをなりもハとなる
をりてえげさがりをうち祝詞のまつり
もいとやはらおぼもぶ。ちまつあはして（如詔）

そまり毎のいとづれをみとりて。こゝろ（こら）
ちゝとよぼもたまう。筋（もぎ）もゆるまう
てくべれをぬなたまよ（古詔）ちまかべ。ぶ
はまるはなもら世のたぶまれなくかは
ハはのとまで。稀なあはしのまず。
（万葉）まぶれハ毎美ちもはなぬのはひう
おのまでハ。詐うくべみ（万葉）たまぬべきうて
くもこれらのまぬ。はものまこあれきのひ
てよと。稀（慰 懃）ものまう（万葉）よゆすあぶよ。部ぶれて

たのしきをあべられ。ごハかしこ。こゝあさこそ
えまいりたるなれと。うゝみまめくしく
古語 いひちぎりたるくなりをこどれるとたハ
まことの所もの。大井の川のるなりおほせ
万葉 幕 ゝとこどうちまりて。彼西ゝ方ゝ
まらしおりと人解部 今市中のすと京人彼 やゝれりの
まで。みぎりに入まゐひをを掛ひて。ひを 冊
ゝこのいを 守 そこにゝ
うちみもかこれなくうしばかゐ見ぎ心

浮ぬ氏 なきゝどまでも。けをたゞ氏 ひ
まて。みばさ 万葉 ゝこのぼり 見 ゝ
みぬ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
のけぢめをなを見ゝ。かて八部そ
布ゝ ゝ ゝ 万葉 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
なるにまゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝもいやまゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
はゝ。ゝのゝのなゝ ゝ 日本紀 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝゝけて。ゝゝを 古事記 日本紀 向脛 け出てなを

まちかねる。て。ほ八。ま。ぐ。ぐ。ぐ

ここしがそのたかきだくをおれてはう
のくまをつよくて八郎ハかぶれめもりんび
うち傷をうつさて八郎ハ七郎をむうひて
ひきゆくハそこの人分たちをく（古語折）
きつるこてすかてはハ神のうちの行う
びくひとりをうちかとなりたあてをの
とりをゆえきれで七郎ハてくりるゆう
ハをはるよなりむで勝とまるハ性（ひの）天の
神乃なりのつこ（真）まだち（剣）紀（日本）もとるれでおる

時ハつくのけぢめはうなりびとおりハ
そこのかちのつよまぐれるー我かはる（堺）
みもれ（古語）をしハおりなりと（方言面目なきさう）いしの。
おれたる大分をしひうひはつあて。はをを
をみまげいでうれハ月をおもなきさかは
ををををををををるて。ま人もほいなげ
ようなれ（分）ち（古語）ををををてひの
いをゆけで。七郎ハ（ひうき）葉（ひく）
はれるたちなりしとをぢさて八郎

ハおほくれよりもをなくらんれはつゝ人となし
たるものべき。行てゞ紀日本をたてたるつゝ所
今の證各 みちむしれはうさぐるとパひてこ
よりる
のゝみなづきく古事記 日本紀 ゝたるかべきのゝだ。
ゝ所ばはゝまつれ。よすでハゝるのとゞほゝる
て。なぐらもやゝへとほゝくなぐるもそ
めゝとなまゝおほせらだされゝとぞ
きゝゝえゝ。